

# 2019年6月・中印・印パ国境辺境高地の旅 (REV 2020 0602)

付・ラダック北部とヌブラ谷地方の外国人旅行地域解放の最新情報

沖 允人(Masato OKI)

## (1) 天空の中印国境に行く

### 国境をめぐる争い

1962年、インド北東部の Pangong Range(パンゴン山脈)の南東にある Chushul(4337m、チュスル、標高や地名綴りは地図や文献により違うので以下は Leomann Map に準拠した)周辺、および、アクサイチンとチャンタン地区(Aksaichin, Changthang Region)でインドと中国は、熾烈な戦いをした。発端は、中国側の主張は、インド側の兵士が McMahone Line(マクマホン・ライン・注1)の北側(中国側)に侵入したといい、インド側の主張は中国軍がインド領である東北辺境地区(NEFA, North-East Frontier Agency・注2)に侵攻したという、1956年頃から続いているチベットを巡る中国とインドとの対立の続きだといわれている。1962年の戦いの結果はインド側の勝利に終わったが、インド側は1383名、中国側は約722名の戦死者がでたという(中印国境紛争・Wikipedia)。

1947年の第一次中印国境紛争後、Aksaichinに中国人民解放軍が侵攻、中華人民共和国が実効支配をするようになると、パキスタンもそれに影響を受け、間もなく、パキスタン正規軍も投入され、カシミール西部を中心に戦闘が行なわれた。国際連合は1948年1月20日の国際連合安全保障理事会決議39でもって停戦を求めたが、戦争は継続され、停戦となったのは1948年12月31日のことであった。停戦監視のため、国際連合インド・パキスタン軍事監視団(UNMOGIP)が派遣されたが、恒久的な和平は結ばれず、1965年に第二次印パ戦争が勃発することとなる。

1965年8月にパキスタンは武装集団をインド支配地域へ送り込んだ。これにインド軍が反応し、1965年、第二次印パ戦争が勃発した。なお、その後、インドと中国・パキスタンの間で直接的な交戦は起こっていないが、中国によるパキスタン支援は、インドにとって敵対性を持つものであった。2010年9月にはインドは核弾頭の搭載が可能な中距離弾道ミサイルをパキスタンと中国に照準を合わせて配備すると表明した。これらの戦争の結果、カシミールの6割はインドの実効支配するところとなり、残りがパキスタンの支配下となった(第二次印パ戦争 Wikipedia)。最近のインド・パキスタン情勢は「ヒマラヤ」489号、2019年・夏号・60-61頁によると、印パ関係は悪化しているという。

以上のように、中印国境と印パ国境地帯をめぐる「天空の争い」は根が深く、現在は一応、平穏に見えるが、何時この均衡が破れるかもしれないという、両国にとって気の抜けない地帯である。もちろん両国は、かなりの軍事施設を国境地帯に構築し、多くの軍隊を駐屯させている。

このような状況から、インド政府は Chushul やその南東の中国国境に近い Hanle(4350m)とその周辺は外国人の立ち入りを厳しく制限していた。

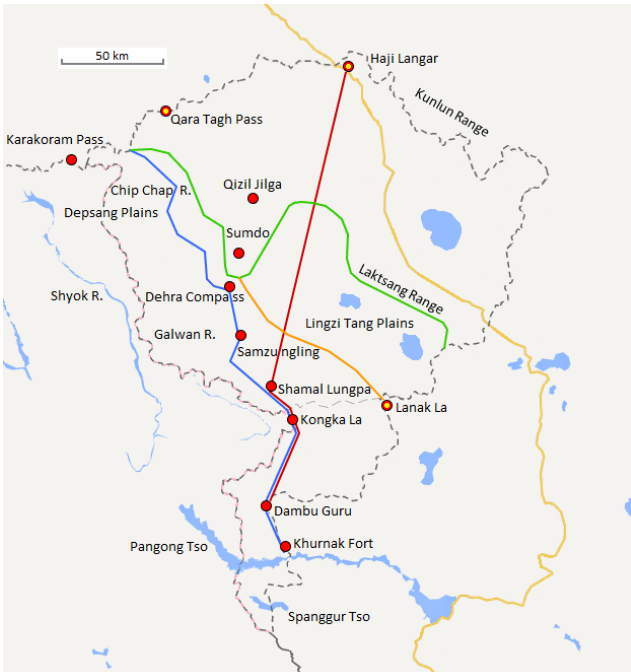
なお、2020年6月2日の中日新聞朝刊3面の北京発の情報によると、中国がパンゴン湖の周辺などでインドに越境して不穏に情勢だと報じている。

### Hanle 解放のニュース

政情がどう変化したか察知できないが、2018年末に、Hanle が外国人に開放されるというニュースが入り、2019年4月から特別許可が発行されるという情報が、私の懇意にしているレーの旅行社 Hidden Himalaya からもたらされた。特別旅行許可書を3人以上の外国人グループに発行するという。同社のスタッフが確認のために Hanle まで調査に行ったという連絡も届いた。私は、20年ほどまえから Hanle 訪問を熱望し、あらゆる手を打っていたが、許可の取得はできなかった。私にとって Hanle は「久遠の地」であった。

Hanle には世界有数の高地(4530m)にある Hanle Observatry(ハンレ天文台, Indian Institute of Astrophysics, Koramangala, Bangaluru 所属)と Hanle Gompa/Monastery(ハンレゴンパ・僧院)がある地として知られていたが、中

国国境に近いChangthang高原に位置するという理由も加わって、民間人の旅行許可の取得は不可能に近かった。



- Foreign Office Line 1873
- Macartney-MacDonald Line 1899 accepted by China until 1959
- - - India's claim line based on the Johnson Line of 1865
- Sinkiang-Tibet Road 1957
- Points to which Indian patrols had been going up to 1958
- Line connecting posts established by Chinese in 1959
- Line separating Indian and Chinese forces on 7 September 1962
- - - China's claim line of 1960 which it reached in 1962

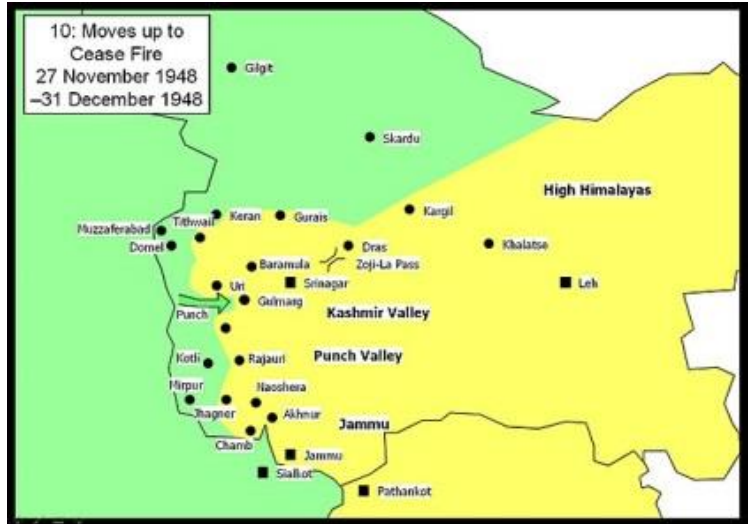


写真1(上) 停戦直前のカシミール(Wikipedia)

1873年-1962年

写真2(左) Aksai Chin Sino-Indian Border map(Wikipedia)

注1:マクマホンラインとは、1914年に、チベット政府とイギリス領インド帝国の間で決められた国境線のことで、イギリス側の全権代表を務めたヘンリー・マクマホン卿の名前から付けられている。(Wikipedia)

注2:The North-East Frontier Agency (NEFA) was one of the political divisions in British India and later the Republic of India until 20 January 1972, when it became the Union Territory of Arunachal Pradesh. The North-East Frontier Agency (NEFA) was one of the political divisions in British India and later the Republic of India until 20 January 1972, when it became the Union Territory of Arunachal Pradesh. (Wikipedia)

Hanle Observatry は Hanle の Nilamkhul Plain と呼ばれている荒涼とした高地の小高い丘(Atop Mt. Saraswati)にある。山麓に直径約 2m の天体観測装置 5 基(Hagar Telescopes)と呼ばれる宇宙空間からのガンマー線を検知するための観測器、宇宙の約 3 割を占めるといわれる暗黒物質 (ダークマター) やブラックホールの謎の解明を目指す施設を建設している(Internet)。



写真3 Hanle Observatry



写真4 天体観測装置5基

日本人としては、1996年12月、東京大学教養部(上野宗隆)、東京大学理学部(山本 智)、理化学研究所(岡 朋治)ら5名(上野宗隆:ヒマラヤは地球最後の楽園か、究極の天文観測サイトを求めて・ハンレへの旅、天文月報1998年12月91巻12号,p594-601)と国学院大学の教授(現名誉教授・小倉勝男・天体物理学観測)が天体観測調査のためにインド政

府から特別許可を取得し、2003年8月21日から同29日まで訪れたのみである。小倉教授とは面談したことがあり、今回、メールで久しぶりに連絡をとることができた。参考・国学院大学(<http://www2.kokugakuin.ac.jp/science/staff/ogu/BN.html>)。

また、National Geographic Magazine の写真家らが数年にわたる交渉の結果、Hanle 訪問の許可を取得し、写真で紹介したことがある(Lang, Karen E. and photos by Mattias Klum. "In their own world: The sacred community of India's forbidden Hanle Valley." *National Geographic Magazine*. January 2004, pp. 88–99.)。それ以後、外国人が Hanle を訪れた記録はないようである。

Hidden Himalaya からの情報により、早速、同行者をつのり、計画を立案した。幸い、2018年秋に Pangong Range 周遊の旅に同行した小野裕伸と、ヒマラヤ協会の昔からの友人である菊地 薫が参加してくれることになった。



写真5 小野(左)とガイドのヤンペル(右)(Photo by Ono)



写真6 菊地(左)と沖(右)(Photo by Ono)

航空便を予約し、ビザを取得し、2019年6月11日に成田空港を出発した。翌日、早朝の便で Ladakh(ラダック)の首都 Leh(3505m,レー)に飛んだ。3日間の高所順応と高地旅行準備の後、チャーターした車で、Hidden Himalaya の社長・Tsewang Yangphel をガイドに伴い、Leh を出発した。Yangphel は Zanskar の出身であるが、かつて Hanle に勉強のために滞在したことがあり、今回のガイドとしては最適任者である。日本語も少しわかる。

幸いなことに、Hanle から北西に移動し、中印紛争の激戦地であった Chushul の南東の Tsaka La(4724m(5600m)、ツァカ・ラ)の峠の近くに建っている戦没者慰霊碑の近くを通り、Chushul を経て、Pangong Tso の湖畔を訪ね、Pangong Range の西側の軍用道路を走行して Tangtse(タンツェ)に出、Chang La(5100m/5300m)チャン・ラ)を越えて Leh に帰着するという6日間の高地旅行の特別許可も取得できた。Leh を出ると 3500m 以下には高度が下がらず、5000m を超す峠をいくつも越える困難な旅となるので、順応と体調には特に留意した。

なお、コースと距離などは付図を参照されたい。

私は、中京山岳会登山隊の隊長として、パンゴン山脈の北西端近くにある Hrong(6210m、ハロン峰)に登山を行った1997年以来、Pangong Range の南東端にある Chushul とそのさらに南東にある Hanle を訪ねたいと思い、何度も旅行許可申請をしたが、国防上の理由から許可にならなかった、Chushul と Hanle は、私にとってなんとしても訪ねたい地であった。

### Indus River に沿って

2019年6月15日にレーを出発し、約1時間で Karu に着く。道路は舗装されている。Indus River に沿って Chumatang(4115m,温泉)に着き、簡易ホテルで休憩し、昼食をとる。ホテルのオーナーがこの地域の出身で、この地域の事情に詳しい。以前に Check Post のあった Mahe(4267m)から Ladakh Range(ラダック山脈)を横断して Chushul に通じる Chumatang Phu を遡るトレッキング・コースがあり、3日ほどで行けるという。途中で峠(Kaksas La,c.5750m)がある。Mahe(5453m),Chumathang(6082m)そして、Chakula(6529m)、無名峰(6400m)、無名峰(6300m)の山々が、2つの湖(Ordong Tso & Yashu Tso)の西にある。Mahe から北に延びる Kakstet La(c.5400m)を越える Palung Lungpa を遡るもう一つのトレッキング・コースもある。ただし、これらの峠は地図によって位置が違って

る。峠の下までは四輪駆動車なら行けるといふ。Chakula は槍ヶ岳のような三角錐の岩山で、Indus River 沿いの道路から奥に見えていた。このあたりの山々のほとんどは 15 年ほど前にイギリス隊によって登られている。

### Hanle の入り口 Nyoma へ

Mahe から先の Indus River に沿った道路も一応簡易舗装されている。Nyoma(4430m、ニョマ)まで 10km あたりのところに、野生の馬(Kyan)、ヤク、そして、めずらしいことに鶴が 3 羽いた。広々としたチベットのよう茶色の高地を走り、Nyoma に午後 3 時に着いた。民泊の宿がある。トイレも洋式で簡易水洗である。



写真 7 Nyoma Gumpa



写真 8 Nyoma Village とマニ石

Nyoma の先の川が大きく曲がる Loma Bend からも道路は一応簡易舗装されている。やがて、南に向かって Hanle River(ハンレ川)に入る。Hanle は宿泊不許可なので、Hanle を訪れた後、Nyoma に帰り、同じ民泊に泊ることにした。

### Hanle を往復

翌日、Nyoma の民泊を午前 8 時に出発し、舗装の途切れた道进行。大変揺れる。午前 9 時に Loma の ITBP(インド・チベット国境警察隊)の Check Post に着いてパスポート・チェックを受ける。Indian Army の Check Post もある。近くには軍用飛行場がある。Loma の長い鉄橋を渡ってから道はやや良くなる。右手奥に雪山が見えている。

午前 11 時に Hanle 着。やっと来たと感激である。先ず、手前の山上にある Hanle Monastery(Gompa,ハンレ・ゴンパ)を 1 時間ほど見学。17 世紀に創建された Gompa で Drukpa Lineage of the Kagyu school of Tibetan Buddhism である。Hanle は、中国・インドの暫定国境(Frontier between India and Chinese-controlled)からわずか約 19 km 離れているところである。

寺院の内部はあまり大きくない。僧侶が一人いた。階段を 10m ほど登って屋上に上がる。付近の眺めは良い。Hanle は、盆地のような地形で、ぐるりは 6000m 級の「天空に聳える知られざる山々」 Raingong(5036m)、Zongchenmo(6141m)、Taktonakpo(5332m)などに囲まれている。広大なチベットらしい高原で全体に赤茶色をしている。ゴンパへの登り口から南西方面(Leomann J & K(No.9)の右下部分)に位置する Khaptak Tokpo の南の Lenak Tokpo と Zimuk Tokpo の源流域の Zongchenmo(6141m、南 2km にチベット未確定国境が延びてきている)から東の Taktonakpo(5332m)あたりの山々の雪山が遠望できた。無名峰 5950m(Lenak Tokpo 源頭),6194m,6100m,6180m(Zongchenmo(?)),6080m の無名峰である(山座同定は、菊地による Google Earth 利用による推定)。Tso Moriri Lake の東南東約 50km あたりである。なお、上記の山々の写真は多分、今回が初めて公表されるものと思われる。

続いて車で 5 分ほど移動し、ゴンパの反対側の小山の上にある前記の Hanle 天文台を見学する。

Hanle から往路を引換し、午後 3 時 40 分に Nyoma に帰着。道が悪いのと標高のせいで大変疲れた。

なお、Hanle の西約 20km にインドで 6 番目に高い Photi La(5524m)、さらに西約 80km にインドで一番高い Umaling La(5883m)があり、自動車道路が通っているが外国人の通行は許可されない。



写真 9 Hanle 周辺はチベットの風景(周辺の山々と天体観測装置 5 基) (Photo by Ogura)



写真 10 Hanle Gomba の内部



写真 11 Hanle Gomba 遠景

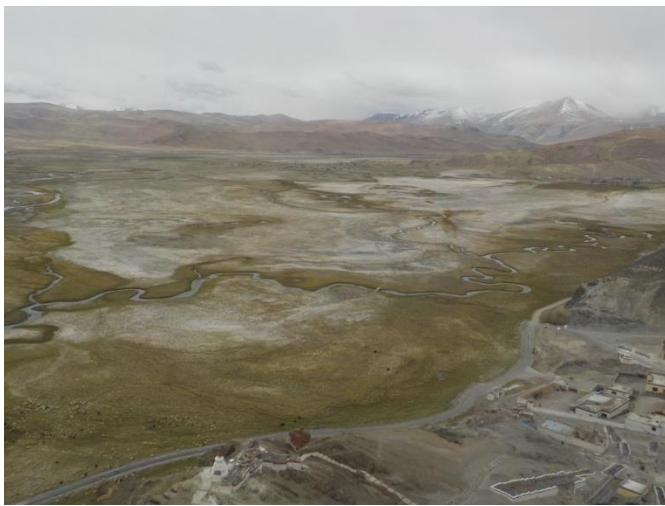


写真 12-1 Hanle Gomba の南西 p.5950 p. 6194 p.6100



写真 12-2 Hanle Gomba の南西 p.6100 p.6180, p.6080(写真 12-1 に続く)

### Tsaga La(4724m)を越えて Chushul へ

Chushul に適当な宿泊施設がないので、Pangong Tso に回り、Takung(4261m)、Latu、Kakstet の無人の村を通過して約 2 時間走って湖畔の Merak((Meruk)4270m,メラック)の民宿に泊ることにした。昨年、Pangong Tso の湖畔周遊の旅で泊まった小奇麗なホテルは、湖畔に宿泊施設が多くなりすぎて環境汚染になるとかで政府の指導で閉鎖されていた。Pangong Tso の湖畔の他の地域も同様に閉鎖された宿泊施設が多い。

Nyoma の民宿を午前 8 時出発、舗装された道を走る。昨日通った Loma の ITBP の Check Post の横を通り、Tsaga(Tsaka)(ツァガ(ツァカ))に向かう。道はあまり良くないので大変揺れる。Asale(アサレ)から Indus River を離れる。Asale を午前 9 時 30 分通過。Tsaga の村から広い斜面の緩い登りになる。道はほとんど舗装されていない。Tsaga La(4724m,ツァガ・ラ)に着く。チベット風のタルチョウが結びつけられたのが風にはためいている。左側の斜面の上には Tsaga River の左岸の無名峰 (c.5380m) が雪をかむっている。Tukmura Tso という湖があるように別の地図には書いてあるが、枯れていて水はない。

やがて 1962 年の中印戦争のときの、Tsaka La の北東約 2km にある Rezag La(5005m)あたりでの戦死者を慰霊する戦没者慰霊場「Kumaon Rezag La Memorial」に着く。慰霊塔と沢山の戦士の墓というか、追悼のための小さい植木が並んでおり、戦死者の名前や軍隊の位が小さく書いた札が付けてある。しばし黙祷を捧げる。しばらく休んで付近の写真を撮り、Chushul へ向かう。途中にもう一つ慰霊塔があった。



写真 13-1 Tsaga La の近く Peak(c.6280m)



写真 13-2 Tsaga La の近く Peaks view (c.6280-c.6210-6290-Yaksir(6100m)(Close up)

Chushul に 12 時に着き。昼食にするが、Chushul にはホテルやレストランはなく、町中の大衆食堂でインド製インスタント・ラーメンを食べる。ITBP の女性隊員が食事をしていた。Chushul を訪れる観光客は通過する人たちばかりであるらしい。小さいゴンパはあるが、あとは軍隊の施設とそこで働く人たちの住まいが点在し、景色も良くないからであろう。Chushul の東約 15km にある Phurchuk La(4782m/4724m)の峠は中国との未確定国境上である。Spanggur Tso(4310m)いう大きな湖の北端である。この峠から東に約 60km 走ると日土(Rudok)という中国側の国境警備の町に着く。ゲルク派のゴンパがあり、町の南に「日土の彫刻群」がある。日土は、Lasa(ラサ)と Kashgal(カシユガル)を結ぶチベット国道の中継地点となっている。Pangong Tso(西湖・うすい塩湖、班公錯)は中国国境あたりで一旦終わり、淡水湖の東湖となり、日土近くまで東に続いている。



写真 14 1962 年の戦没者の慰霊碑(Rezang La Memorial)



写真 15 慰霊樹(Rezang La Memorial)



写真 16 1962 年の戦没者の慰霊碑(Chushul Memorial)(By Internet)



写真 17 Pangong Tso(4300m)のインド側東端近く



写真 18 Pangong Tso の中国側・2008 年冬季  
(中京山岳会隊が世界で初めて縦断した)



写真 19 Chushul 記念標識(冬・-45℃、夏・+15℃)



写真 20 Chushul の村の一部(軍の施設は山影にあり見えない)

Chushul を午後 3 時半に出て、舗装の途切れた道を Merak に向けて走る。起伏もあり、ジグザグに走るが大変揺れる。午後 4 時 50 分頃に Merak の民宿に着く。民宿は「AMUCHI(チベット医師) Homesaty」という名前で、オーナーはチベット医者である。ミルクティーとビスケットを食べて休む。ツインの部屋で大きいベッドがある部屋を使わせてもらい、食事はストーブのある家族の食堂でとらせてもらった。



21 新雪のあった Merak の 6 月 18 日の朝  
車の手前の積み荷は建物の建設に使用する日干しレンガ



写真 22 かなり裕福な民宿「AMUCHI(チベット医師) Homesaty」  
の食堂(手前の赤い服は小野)



写真 23-1 Merak から見える山々(Close up)



写真 23-2 Merak から見える山々



Peaks of Pangong Range Southeast Region from Merak Village by Dr.AN

写真 23-3 Merak から見える山々 PPT→JPEG

民宿のオーナーに、この宿から見える雪の山々の名前をおしえてもらい、スケッチに書き込む。Merak の村からの山々は、左から Phardong Ri, Malpodhing Ri, Tsemuru, Dheng Ri, Pangdhing Ri といい、AMCH Homestay の民宿の主人による説明である。スケッチをし、山名を記入する。

なお、Merak 山群の最高峰は、Pangong 山脈の主稜線上にある Kang Dorma(c.6125m)といわれていて、未踏峰であるが、Merak の村からは、写真3 の山々に隠されて見えないようである。

### Tangtse 経由で Leh へ帰る

今日は、Merak から Tangtse に出て泊まる。天候は、雪から曇り、晴、小雪と、目まぐるしく変わった。

朝起きて外を見ると真っ白の雪景色だった。1cm くらい積もっている。山は全然見えない。

朝食を済ませ、午前8時に小雪のなかを出発する。1時間半ほどで Chushul に着き、そのまま通過する。

Pangong Range 南東端に近いところにある雪が15cmほど積もった峠(Kongra La, 5500m)をスリップに注意しながら越え、どんどん下り、10時30分に2013年に栃木県隊(沖隊長ら5名)が初登頂した Mari(6587m, マリ峰)のベースキャンプあたりに着き、少し晴れてきたので11時すぎまで川原でお茶など飲んで休憩する。

医療診療所やバザールのある Tangtse に午後1時30分に着き、昨年と同じ簡易ホテル「Zamshering」にチェック・インする。Pangong Tso 観光に行くというインド人団体が泊っていて、丁度、バイキング・スタイルの昼食を庭でとっていたので、私たちもそれに便乗する。風が吹き出して寒いので部屋に入る。記録の整理をして時間をつぶす。

6月19日、Tangtse を午前8時に出発する。曇りであるが、幸い、雪は降っていない。

Tangtse の続きにある Dubruk(ダブルック)の Check Post に着いたが、これから越える Chang La(530m)が積雪で渋滞のため、1時間半ほど待つ。Nubra Valley(ヌブラ谷)方面に行く Shyok River 沿いの道は車が動いている。Check Post の向こうに雪山の連山が見えている。Ladakh Range の Shyok River(シャイヨーク川)沿いの Shyok 村西側の山々で、6100m, Shulung(6150m), 5970m の無名峰である(山座同定は、菊地による Google Earth 利用による推定)。タベの新雪で白くなっていて朝日があたり、美しい。

2時間ほど待って、やっと動き出したがノロノロで、車やバイクが数珠つなぎである。11時頃に Chang La に着いたが、雪空で展望はないのでそのまま通過する。

途中の Sakti あたりから Khardung La の南西にある Wari La (5312m, ワリ・ラ)が遠く高くに見えているが、白く雪で覆われて、本日は通行止めとなっている。数日後、この峠を、Nubra Valley からの Leh への帰途、雪の中を苦労して越えた。Karu を経由し、午後1時半に Leh の Lingzin Hotel に到着した。

なお、Ladakh 北部と Nubra Valley の解禁最新情報は文末のリストと概念図を参照されたい。



写真24 Tangtse の Dubruk Check Post から眺めた雪山、Ladakh Range の Shyok River 沿いの Shyok 村西側の Shulung(6150m, Orizane Map)などの未踏峰連山



## (2) 天空の印パ国境・Nubra Valley への旅

### 未踏の山を探して

小野は仕事の都合で一足先に帰国したので、沖と菊地は Leh で 2 日間休養と準備をし、6 月 22 日に Leh を出発して Nubra Valley の旅に出発する。



写真 25 菊地(左)と沖(右) Siachen(野ばら)の咲き誇る村にて

2019 年 4 月から新しく外国人に開放された Siachen Glacier 方面と Shyok River の奥地に特別旅行許可を取得して向かう。午前 8 時 10 分に出発。大手の旅行社のリモ社(RIMO EXPEDITION) の新社屋の横を通り、Khardung La(5359m)に向かう。峠は雪雲の中であった。峠の南側にある South Spur にある軍の Check Post でパスポートのチェックを受ける。車は多いし雪が降ってきたし、道に雪が少し積もっているの、どの車もノロノロ運転でなかなか進まない。車が多く停車していて混雑しているので、峠に着いたが下車しないでそのまま下る。

しばらく下って、North Spur の軍の Check Post でパスポートのチェックを受け、茶店で紅茶を飲み、再び、しばらく下って、Khardung の村に着いて、小さな食堂で昼食をとる。ラーメンと焼きそばだったが、焼きそばが意外にうまかった。

村から下っていくと、1 時間ほどで、右手眼下に Shyok River 支流にある Rongdo 谷の Rongdo Village(3343m/3480m)が Shyok River の対岸(左岸)に見える。谷の入口に緑の林が少しある。両側は岩の傾斜の強い斜面で、頂上上部には雪が残っている。車道は対岸・左岸にしかない。少しガスが晴れて上のほうが見えてきた。

来た道を引き返し、Khalsar(3500m,カルサル)の村のところで橋を渡って Nubra River を対岸に渡り、左岸に行くと、すぐに Rongdo Valley への分かれ道を過ぎる。Tirth(ティリト)の小さな村を過ぎ、1 時間ほどで、Sumur/Sumoor/Sursur(スムル)に着いた。午後 3 時 45 分に Nubra Valley の Sumur(高度計によると 3150m)のゲスト・ハウス「Namgial Lhamachan Guest House(ラムギャル・ラマチャン)」にチェック・インする。キャンプのできる広い庭もある。いろいろな野菜がある野菜畑が沢山ある。午後 8 時に寝る。高度がさがったせいか、寒くない。Sumur から Deskit の裏山(Ladakh Range)のパノラマが見える。6080m(Olizane), 6180m(Google), 6110m(Olizane)などで、Google でほぼ特定できると菊地はいう。

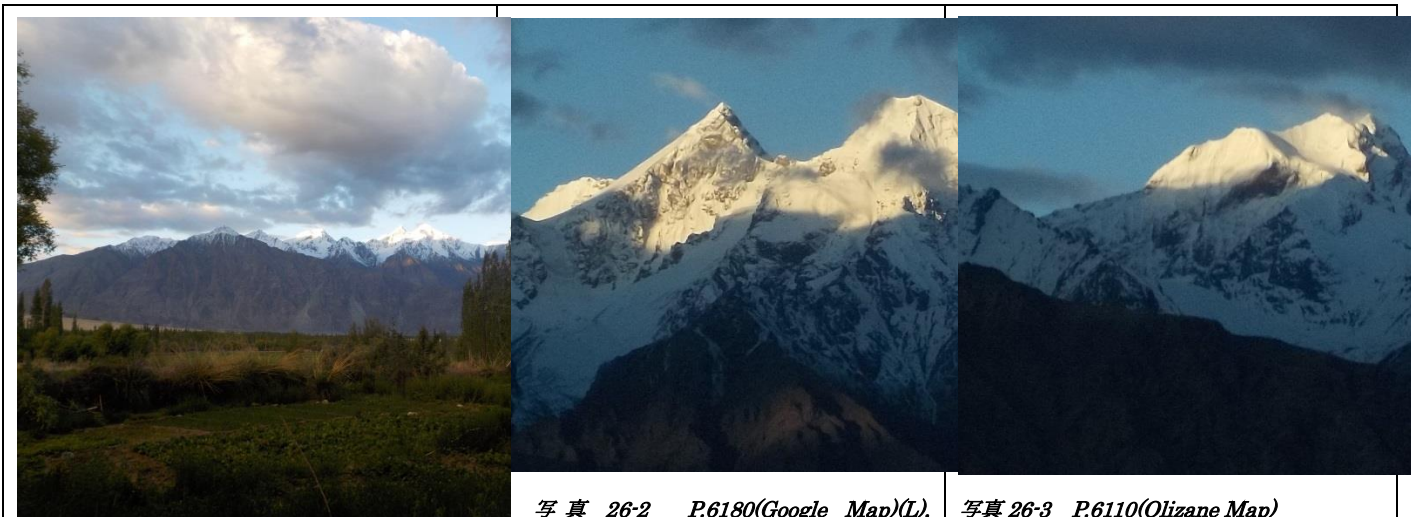


写真 26-1 Ladakh Range, Panorama from Sumur Hotel

写真 26-2 P.6180(Google Map)(L), P.6080(Right) (Photo by Kikuchi)

写真 26-3 P.6110(Olizane Map)

## Saser Kangri Mts.の南の Rongdo Valley の偵察

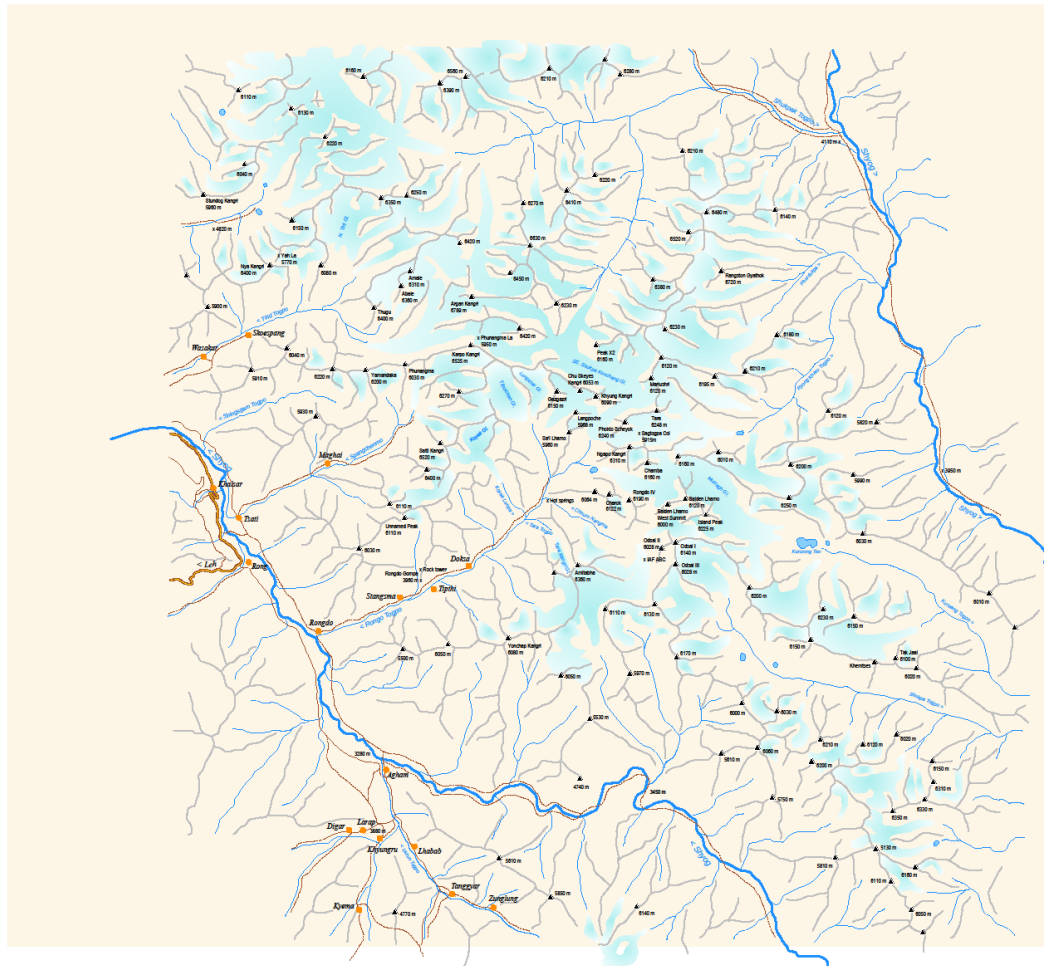
6月22日、Sumurを午前8時10分出発。40分ほどで分かれ道に着き、左岸の未舗装の道を Rongdo Valley に向けて進む。広い荒れた河原のような道で、車はひどく揺れる。対岸の向こうの Khardoung La に続く右岸の道が見えている。

午前9時10分に小橋を渡り、9時15分に Tsati(3185m,サテイ)の村の小さな中学校(Gvt.Middle School)の横を通過する。樹木が多い村である。ガタガタ道がつづき、10時10分に Rongdo の村の入り口に着く。高さ5m くらいのチョルテンとマニ車とお堂があり、その横に小さな小学校がある。

Rongdo Valley に架かる新しい木の小橋を渡ると一軒の民家があった。村には谷に沿って上流に9軒の民家があり、約42名が住んでいるという。小学校には6-7名が通っている。犬と猫がいる。狭い敷地に建つ民家には畠もある。この村から上流に向かう山道ができていて、途中にカルカ(放牧小屋)があり、村人の足で約2時間かかるという。さらに2時間で小さな温泉があり、村人はそこまではときどき行くという。我々の足では、その倍以上はかかりそうである。

谷は狭い。Rongdo Valley 上流域の山々のこれまでの登山隊の BC(5375m)までの約20km は、イギリス隊やインド隊などの記録だと3日かかるという。1875mの高度差があり、途中に良いキャンプ地はないという。Saser Kangri Mts.の南東にあるこの谷の上流の山々は、外国隊の登山許可が取得できることから近年、各国が注目している山域で、未踏峰も多く残っている。入口の村と周辺に12時までいて引き返す。

**地図 Saser Kangri Mts.南東部の Rongdo Valley(外国隊に登山許可があるので注目されている)(Karakorum 2018 c Tobias Pfefferkorn 03/2019)**  
 文献(1) Goffin Keith :“Valley, Phokto Scheyok (Black Pyramid), South Face”, *American Alpine Journal*. 2019, pp.295-296  
 (2) Goffin Keith: British-German Expedition to RongdoValley, Indian Himalaya First Ascent of Phokto Scheyok (‘Black Pyramid Peak’) 6235m,East Karakoram 23rd July 2018, *Asian Alpine E-News* 34, August, 2018, pp.22-32



0 5 10  
km  
Karakorum 2018 © Tobias Pfefferkorn 03/2019

0 5 10  
km  
Karakorum 2018 © Tobias Pfefferkorn 03/2019



写真 27 Saser Kangri Mts. 南部の Rongdo Valleey 入口



写真 28 Rongdo Valleey, Mariush (6120m, Naga Kangri) south face and southwest ridge (Photo by Joie Seagram)



写真 29  
Rongdo Valleey,  
Phokto Scheyok  
(6235m, Black  
Pyramid), South  
Face (Photo by  
G.Keith)

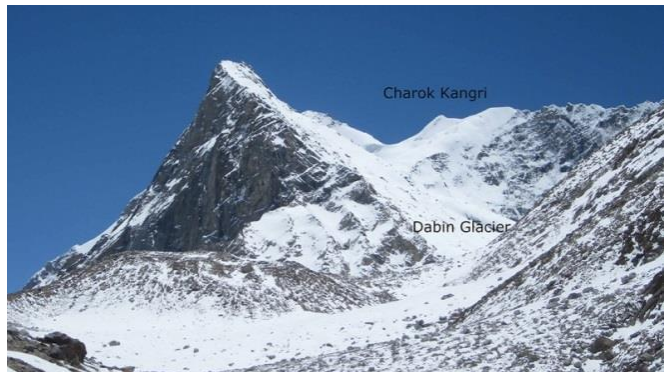


写真 30 Dabin Glacvier, Rongdo Charok Kangri (6122m)  
(Photo by Joie Seagram)

Shyok River にかける鉄橋の建設中のところまで戻って昼食にする。橋はほとんどできているが、なぜか建設は中止になっている。これができると Leh からアプローチが Sumur ありまで行って折り返す必要がなくなり、半日は短縮できる。しかし、工事再開の目途はたっていないという。ここから、Wari La (5312m) 方面の雪山がきれいにみえる。

Sumur に帰り、午後は、村の少し先の山側にある Sumur のゴンパを訪ねる。道から山側へ入ったところにある大きな Samtaling Gompa (サムタリン・ゴンパ) で、階段を登って本堂の脇にある本尊のある建物を開けてもらって靴を脱いで中に入る。阿弥陀如来など本尊の脇に 2 つのチベットの仏像が座している。壁画もきれいである。千手観音のタンカが掛けてあった。町の中にも小さいゴンパ (Sumur Gompa と Onpo Gompa) とがあり、少し北には (Kydkhar Gompa) がある。Sumur のホテルに泊まる。

### Siachen Glacier の入り口まで

Sumur から Nubra Valley の上流に向かい、特別許可取得の限界地点である Warshi あたりまで偵察する。Sumur を出ると、すぐに Teger (テーゲル) という小さな村を通過し、午前 8 時 40 分、Chamshan (Saser Kangri-II の BC に至る Sakang Tokpo が東から合流するところで橋を渡る。対岸に Charasa Gompa が見えている。

小さな学校のある Yoksam (ヨクサム) を過ぎ、ゴンパのある Tirisha (Tirshu) を過ぎ、9 時 5 分に温泉がある Panamik (パナミック) を通過する。Leh から約 140km あり、Nubra River の対岸の丘の上に Ensa Gompa (エンサ・ゴンパ) がみえている。

午前 9 時 15 分に Phukpoche (プクポチェ) に着く。ここに Check Post があり、パスポートのチェックがある。すぐに小さな村 Hargan (ハルゲン) で Pokpoche Tokpot が東から合流してくる村がある。10 時 10 分に Rimo Muztag 方面に入る入口の Sasoma (サソマ) の軍のキャンプに着き、パスポートのチェックがあり、運転手は免許証と旅行許可証を預けさされる。沢山の兵隊がおり、建物も多く、敷地も広い。建物の屋根には迷走模様が描かれていて、パキスタンの戦いにそなえているようである。しかし、あまり

緊張感はない。すぐに Changlung(チャグルン)に着く。ここにも温泉があるというがはっきりしない。Sasoma の右手に Thrum Buti Chu (トルン・ブティ・チュー)谷沿いに Saser Pass(La)(5411m,サセル・パス,サセル・ブランサ)への道が分かれ、ジグザクに急な斜面を登っていく軍の車が見えていた。昔の徒歩で越えていた道もところどころにジグザクに残っている。ここらあたりから Nubra Valley 沿いの道が悪くなり、舗装も途切れてくる。ガタガタ揺れるのでどこかに掴まっていなければならない。Sasoma は、HAJ(尾形好雄隊長)とインドとの合同隊が 1984 年に Mamostong Kangri- I (7516m)に初登頂したときの出発点であり、そして、その先の Warshi は 1988 年に、HAJ(尾形好雄隊長)とインドとの合同隊が Rimo- I (7385m)に初登頂したとき通った村である。かつての先達の苦労を偲び、感無量である。

Tongstet (Stongstut, トングステット)などと村がつづき、Sasoma から約 15km ほどで Warshi(11447ft=3489m の標識がある)に着く。警察の Check Post のテントがあり、ここから先には、今回の旅行許可では入域できない。村の端にめずらしくヒンズーの寺があり、その先に鉄橋がかかっている、シアチェン・ベース(Siachen Base Camp)に向かっている。ここらあたりの左右の斜面は切り立った岩壁で、Karakoram Range の山容である。典型的な U 字渓谷である。野生のバラが沢山咲いている、紅色、ピンク、白色で、日本のバラに比較すると小型である。Siachen とは土地の言葉で「野生のバラ」の意味である。Siachen BC(シアチェン・ベースキャンプ)というのが Warshi の 20km 奥にある。軍隊が時々アレンジしてインドの民間人を 40 人ほど集めて、Siachen BC の奥の Kumar Post(4880m, Indian Army の Col.Narindar Kumar が 1981 年に Sia Kangri- I (7422m)に初登頂のときに命名した基地)という地点まで Trekking Expedition を実施している。希望者が多くてなかなか選ばれるのは難しいらしい。

Warshi まで Sumur から約 80km ある。Warshi から 1km くだったところにメディカル・サブ・サービスの看板があった。このあたり、左手奥に高い山が見えてきた。Olizane 地図にある Wusak(5970m)という山らしい。続いて、白い雪山が見えてきたが、N.Kimi Gl. (北・キミ氷河)の源頭にある 6000m 峰のようである。

Sasoma の Check Post にある軍隊の喫茶テントでサモサ(野菜とジャガイモのテンプレ)と紅茶をごちそうになった。

Sasoma の橋を渡り、下っていくと右手の岩山の上に雪山が次々と現れるが山名は不明である。



写真 31 印パ中の未確定国境・赤線



写真 32 Indian Army の Col.Narindar Kumar(Siachen Gl. で活躍)(Internet)



写真 33 1981 年 Indian Army 隊は Sia Kangri(7422m)に初登頂(Internet)



写真 34 Seachen Gl.入口の村 Warshi(Check Post、ここから先は外国人入城禁止)

Warshi まで Sumur から約 80km ある。Warshi から 1km くだったところにメディカル・サブ・サービスの看板があった。このあたり、左手奥に高い山が見えてきた。Olizane 地区にある Wusak(5970m)という山らしい。続いて、白い雪山が見えてきたが、N.Kimi Gl. (北・キミ氷河)の源頭にある 6000m 峰のようである。

Sasoma の Check Post にある軍隊の喫茶テントでサモサ(野菜とジャガイモのテンブラ)と紅茶をごちそうになった。

Sasoma の橋を渡り、下っていくと右手の岩山の上に雪山が次々と現れるが山名は不明である。



写真 35 Mamoston Mts.(右)、 Theltop Mts.(中)、 Saser Mts.(右) と連なる山々(Internet)。

画質悪いが、Khardung La あたりから北方を撮影した写真の中央あたりの Saser Mts.の左に三角錐の Theltop が見えている。

Panamik の温泉が近づくと、Shyok River の向こうに雪山の連山が見える。左(東)から、Theltop(6120m)、Samgyal-S,6020m (サムギャル南峰)、Samgyal-N,(サムギャル北峰 5810m)、Spanpuk(6110m,スパンプーク)の山々のようであるが確信はない。これらの山々はイギリス隊が数年通って、ほとんど登頂している。日本隊は皆無である。

午後 3 時 30 分に Panamik の温泉に着いて、オアシス(Oasia, Hebal Bath & Café)という温泉付きのゆったりした敷地に建っているレスト・ハウスに部屋が見つかったので泊まることにした。温泉は別棟になっているのでスリッパを履いていく。1 階が浴場で、熱いのとぬるいのがある。ぬるいのに入る。丁度良い湯加減で久しぶりにゆったりする。どっぷり浸かって、リラックスできた。洗うのは 2 階にあるシャワー室であるが、2 つ蛇口があったが、どちらの蛇口からも大変熱い湯がでてくるので、思うように洗えなかった。ざっと洗って、もう一度 1 階の浴槽に入る。

午後 4 時に部屋に帰って記録の整理をしながら夕食まで休む。部屋は良くないが、フutonは柔らかく、温泉地帯のせいか温かい。

### Deskit(Disket)に泊る

6 月 24 日、曇り、時々小雨の中を午前 8 時 10 分 Panamik の温泉を出発。Panamik の温泉の対岸の山の上にある Ensa Gompa (エンサ・ゴンパ)に向かう。Pukpoche (プクポチェ)の Check Post を過ぎてしばらくの橋のある所まで

上流に引き返し、8時45分に2006年にできた鉄の橋で Nubra Valley を渡る。Nubra Valley に架かる橋はあと一つしかない・下流に向かい9時にゴンパに着く。上流や対岸の Panamik の眺めが良い。

同じ道を帰り、Check Post を再び通過し、下る。Yuksam (ヨクサム)という小さな集落を過ぎると Sakang Togpo(サカン・トグポ)の谷が東から合流してくる。1985年にHAJ(沖允人隊長)とITBPのHukam Singh 隊長と組んで Saser Kangri- II に初登頂したとき向かった谷である。Olizane Map では Sakang Togpo となっているが、地元では Chameshan Lungpa(チャムシェン・ルンパ)というらしい。上流にサカン(Skang)というピークがある。

午前10時40分に Chameshan Lungpa に架かる橋を渡る。この橋の建設記念の標識があり Chameshan Lungpa と記されている。

午前11時に Sumur を通過し、Lagzhum (ラグズム,3020m)を通り、大きく迂回して Khalsar(カルサール)に出て、西に向かい、Shyok River に架かる鉄橋を渡り、Shyok River 上流の Deskit(デスクット)に向かう。このあたりは広い河原になっていて、サンド・サファリという河原の砂の広場をスノー・モービルのようなオートバイで走る遊びが行われていて、貸しオートバイ屋がある。Siachen Glacier の眺めが雄大である。曇っているのが残念である。インド政府による「Kilik Pass(中国とパキスタン国境上の峠 4827m) to Kaniyakumari(インド最南端の岬)」という宣伝標識が立っている。「K2(パキスタンの高峰(8611m) to Kaniyakumari)」という標識も見掛けた。河原の広いところには、「SIACHEN WARRIORS(戦士達)」という大きな文字標識が立ててある。インドの所有権を主張しているらしい。

Kardung の村から約 23km で Kalshar に着き、さらに約 25km で、大きな村でゴンパのある Deskit(3150m)に着く。小山の上にゴンパと高さ 30m ほどの極彩色の大きな弥勒菩薩像(Chanba, チャンバ)がある。ゴンパは 15 世紀頃、Gelugpa (Yellow Hat ・ゲルク派)の開祖 Tsongkhapa(ツォンカバ)の弟子、Changzem Tserab Zangpo(チャムセン・シェラブ・サンボ)によって建立されたという。Leh の南東約 10km にある Thikse Gompa の分院となっている。2010年に完成した弥勒菩薩像をゆっくり見学した。

Deskit の弥勒菩薩像を前景にして Tirid Valley の奥に 6250m,6360m(Amale (?)), 6140(Thugu(?)),6040m の雪をまとった岩山群が見える(山座同定は、菊地による Google Earth 利用による推定)。



写真 36 Disket(3150m)の弥勒菩薩像(close up)



写真 37 Disket の弥勒菩薩像(左下)と Gompa(右上)



写真 38 Disket のホテルから  
Teltep(6002m)の山群

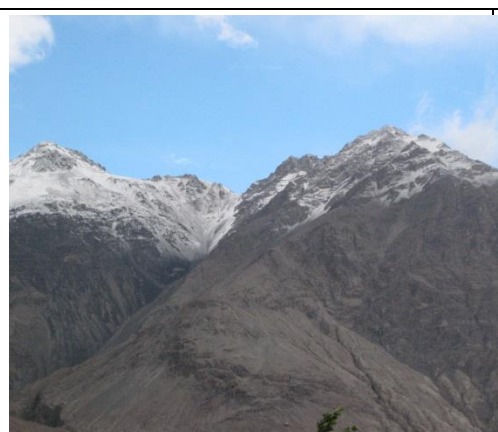


写真 39 Disket のホテルから  
右・Spangpuk(6110m)左・Teltep(6002m)の山群



写真 40 From right 6250m,6360m  
(Amale), 6140,(Thugu),6040m の雪をまとった岩  
山群

Deskit の町に下り、川に近いところにある Nubra Grand Hotel という三ツ星クラスのホテルに午後 2 時半にチェック・インする。広大な敷地に大きなホテルが 1 軒だけ建っている。

庭に面した部屋はなかなかきれいで、熱い湯もふんだんに出るので、シャワーを浴びてゆっくりする。窓から山の手で Disket Gompa と弥勒菩薩像が見えている。

## パキスタン国境に近い Tyakshi まで往復

6 月 25 日高曇りで雲が多い天候の中、Deskit から西に向かって砂丘の広がりを通り、約 8km で Hundar(フンダル)を通り、Hundar の河原にはラクダ・サファリの案内所があり、昔、シルクロードから来たというラクダが数頭いる。Hundar には美しい庭で居心地のよさそうなホテルやゲスト・ハウスが多くある。

Skampuk(スカンプーク)、Thoise(トイセ)という村を通り Shyok River の左岸の道を下る。雲が多く、天気は良くないが幸い雨は降らない。しばらくで右手に軍隊の兵舎が沢山並んでいるので見え、その先に軍用飛行場がある。4km ほどの滑走路が見える。Olizane の地図によると標高は 3100m となっている。

午前 9 時 15 分に Thoise を通過する。次に Skuru(スクル)の村となり谷は段々狭くなる。ここらあたりで高度計によると標高は 3300m である。Skuru の対岸の小山の上にザンポ・Zangpo Chosling Gompa(チョスリン・ゴンパ)がある。Skuru の村にもゴンパがある。この谷の次の Udmaru Tokgo(ウドゥマル谷)の上流に岩山の間から雪の付いた山がみえている。Kubet Glacier(クベット氷河)の源頭の 6000m の無名峰らしい。

緑の多い Udmaru の村を過ぎるとすぐに右岸に雄大な扇状地が見える。上部から押しだしてくる膨大な岩と砂によってできたもので、規模は小さいが同様のものが随所に見られる。

## 未踏の峻峰 K25 (6520m) を眺める

Udmaru から北西に約 12km 進むと Changmar の数軒の村があるが、この手前の谷の奥に岩と雪のピークの連なる峻峰が望見できる。現地では山座同定はできなかったが、帰国後の菊地の綿密な作業の数々で、このあたりの様子が明快になった。特に K25(6520m, by Olizane)(by Google, Pastan Kangri, 6523m)は、登頂した記録は見当たらないので、未踏峰かもしれない。山姿・標高・アプローチともに魅力がある。登山許可も可能かも分からない。K25 の東の Saltro Range(Saltoro Kangri, 7742m から続く)末端近くの Kubet Glacier 源頭の山々(6110m, 6280m, 6200m, 6000m, by Orizane Map)は K25 に向かう Phastan Togpo の支流の Suchi Lungpa の源頭の山々でもあり、特に 6000m 峰は Sukru Gompa あたりから Udmaru Togpo の谷の奥に白く見えていた山だと思われ、K25 とともに、いずれも未踏峰と思われ、登高欲をそそられる山姿であった。

地図を眺め、写真を調べていると、かつてのように未踏の山々の登山への夢が広がる。私には、もう、実際に登ることはできないが、夢で登ることにする。



写真 41 25(Pastan Kangir)(6520m/6523m)(Photo by Kikuchi)



写真 42 Chalungka 村の対岸の南西の無名峰 (Bogdan N(5680m)(Olizane Map)(Photo by Kikuchi)



写真 43 Bogdan N(5680m(L) 5300m)(Photo by Kikuchi)

午前 10 時 30 分に大きい村 Bogdang(2970m,ボグダン)を過ぎ、11 時 20 分 Chalungka(チャルンカ)、そして、11 時 40 分 Turtuk(トゥルトック)に着く。ここは 2010 年から外国人が入れるようになった。Check Post があつたが、厳しくはなかつた。Bogdang の北北西約 5km に無名峰(5540m)その先の約 10km に無名峰(5650m)が雪をまとった三角錐の形で道路から望見できた。

Bogdang は、インド・パキスタン停戦ラインの僅か 15km 手前で、このあたりの Baltisatn と呼ばれる地域の人々はイスラーム教徒で、美人が多いという。この近くの橋までがかつてはパキスタン領であつたが、1971 年のインドとパキスタンの戦争で、インドが勝利をおさめ、この周辺の 950 ヘクタールがインドのものになったという。

カシミールの帰属をめぐり、インドとパキスタンで争われた 1947 年の第一次印パ戦争が最初の戦いである。この結果、カシミールは両国が分割して実効支配することとなった。第二次印パ戦争(1965 年)は、その後、第三次印パ戦争(1971 年)に続いた。

第三次印パ戦争は、1971 年 12 月に行われた戦争で、東パキスタン独立運動(バングラデシュ独立戦争)に介入したインドと、パキスタン両軍が衝突したが、戦局は国力に勝るインドの有利に進み、東パキスタンは 1971 年 12 月 16 日にバングラデシュとして独立した。1972 年 7 月 2 日には、Simla 協定でパキスタンもバングラデシュ独立を承認した(第三次印パ戦争(Wikipedia))。



このあたりを車で移動して見学する。Tyakshi(2800m,ティヤクシ)という村にゲートがあり、ここから先は外国人はもちろん一般のインド人も立ち入り禁止である。沢山の車が駐車している。写真をとって 12 時頃に引き返し、しばらく走って道端の茶店でカレーとチャパティの昼食をとる。チキン・カレーがうまかった。ドライ・アプリコットを売っていた。Hundal(3017m)が近づくと、Theltop(6002m)らしい三角錐の雪山が見えているが、はっきりしない。

Hundal に泊まることにし、午後 4 時半に着く。Hundal は大きな村で学校や病院もある。宿は見つかったが、ガイドの Yampel がタベ泊まった立派な Grand Nubra Ladakh ホテルに連絡を取ってみたら、幸い部屋があることがわかったので、その豪華なホテルに行く。雲が多いが Saser Kangri Mts.とそれに続く山々などが見えていた。しかし、雲が多く、山座の同定は困難である。Rongdo Valley 近くの山も見えている。Grand Nubra Ladakh ホテルの部屋が確保できたのは、昨日、Delhi-Leh のフライトが天候不順でキャンセルになり、予約のお客が来なかったためだいう。このところ天気は曇り・小雨などで、晴れた日はない。午後 5 時 30 分に昨夜と同じホテルに着いて泊まる。





写真 44 Nubra River 上流の最後の Check Post(Blue Tent)のある Tyakshi(2800m)村

### 雪の Wari La 越え

午前 8 時出発。曇りで風が強い。本日の予定は、Indus River を下り、Deskit から Shyok River の左岸を走り、Aghyam(Agham,3280m)で、Shyok River を離れ、Tanggyar(Tangyur,3852m)を過ぎて、Wari La(5280m)を越え、Dakthank、Sakti、Chemerey を通過して Karu へでる。Karu から 35km で Leh に帰着。Wari La(Wari La(5280m) の東に Tangyar(5920m)、西に Arzu(5087m)のピークが見えていた。

ていた。

Wari La が越えられないようだったら、再び Khaldong La(5578m/5359m)を越えて Leh に帰らなければならない。

Deshkit のホテルを出発し、少し小雨の中を Tanggyar(Tangyur)から Lurten Lungpa(ルルテン・ルンパ)の谷に入る。小さい橋がある。その先から脇道に入って少し走り大きな斜面に広がる Tanggyar の村を見学する。Kurgon Gompa(3980m)もある。



写真 45 Wari La 入り口の Tanggyar(3852m)村とゴンパ



写真 46 Wari La(5280m)の雪のジグザグ道



写真 47 Wari La 直下の雪崩地帯からの脱出



写真 48 夕闇せまる Wari La から Stok Kangri Mts.

Wari La に登って行くと峠に近づくにつれて積雪が深くなる。他に 2 台の車がいたので協力しながらジリジリと進

む。タイヤ・チェーンをつけたが、四輪駆動車ではないので、雪道にはまるとなかなか脱出できない。2時間ほど頑張ったが、ますます雪は深くなるので、峠越えは諦めることとする。

少し下って峠のほう見あげるとトラックと人が小さく見えた。ガイドの Yampel が携帯電話で国境地帯の道路公団のような組織(BRO,Boder Road Organization)に通報したのが通じたらしく、救援隊が Indus River 側の Karu の村の方から登ってきたらしい。峠まで 6km の道路標識あたりにデポしてあったブルドーザーを動かす計画らしく、予備のバッテリーを積んでやってくるという。工事人夫も 10 名ほどトラックでやってきているという。それならと救援を待つことにし、車の中で暖房をつけて待つ。

高度 5000m ほどなので、もし、順応していなければ、救援活動はもちろん、待っているのも苦しいところである。10 名の人夫は女性がほとんどで、それぞれに長い柄の付いたスコップを持っていて、陽気である。

それから約 3 時間あまり待ってやっと峠の通過が可能になった。除雪してくれた道を走ってみるとかなりの箇所雪崩の跡があり、デブリが道をふさいでいるので時間がかかったのである。何とか雪のタルチョーが雪に半分埋まって立っている Wari La の峠を通過できた。午後 5 時である。

峠の向こうも予想に反して雪の斜面は広く急で、道は大きくジグザグを繰り返して下っていく。Indus River の向こうの正面に Stok Kangri(6153m)連山の西端の山から Kang Yatse-1(6400m,カン・ヤッセイ)にかけての山並みが雪に輝いている。下方に Thak Toh(タク・トー)と Sakit(サキット)の村の緑が広がって見える。Chang La(チャン・ラ)に行くときに見える Chemdrey(チェムレ)の 4 階建てらしい立派なゴンパが山の中腹に綺麗にみえている。Hemis Gompa(ヘミス・ゴンパ)の分院である。豊かな村の中を通過し、Karu に午後 6 時に着いた。Karu から国道 1 号線を快調に走り、夕闇せまる午後 7 時に Leh のホテルに帰着した。

2 日後に Leh から Delhi に向かう飛行機に乗るため、早朝の Leh 空港でふと目に留まったインド軍の軍用機に、今回の旅が国境をめぐる旅であったことを実感させられた。

(本校は HIMALAYA, No.490, 2019 AUTUMN, pp.34-48 を元に補筆・修正した)



写真 49 Leh Airport の軍用機

## ヌブラ・ラダック外国人旅行解禁最新情報(2019/6/29 Information by Hidden Himalaya)

1	Khalsi, Domkhar, Skurbuchan, Hanu, Baima, Dha in Khalsi Sub-Division.
2	Khardong, Khalsar, Trith upto Warsi and Yarma Gonbo, Disket, Hunder, Turtuk, Pachathang, Tyakshi in Nubra Sub-Division.
3	Upshi, TsomoRiRi/Korzok in Nyoma Sub-Division.
4	Upshi, Dipling, Puga, TsomoRiRi/Korzok in Nyoma Sub-Division.
5	Kharu, Changla, Durbuk, Tangtse, Lukhung, Spangmik, Man-merag(Pangong Lake) in Nyoma Sub-Division.

6	Upshi, Chumathang, Mahe, Loma Bend in Nyoma Division.
7	Chushul- Kartsangla- Mahe
8	Durbuk- Shachukul- Tharuk- Sato Kargyam- Parma- Erath- Chushul and Loma- Hanley (Not Allowed to Umling Pass)
9	Spankmik to Man and Merak in the Pangong Lake area and from Mahe to Loma Bend and from Merak to Loma Bend.
10	Korzok- Nurb- Sumdo- Parangla- Kazaand
11	Agyam- Shayok- Durbuk
12	Phyang- Dokla- HunderDok- Hunder (For Trekking)
13	Basgo- Ney- HunderDok- Hunder (For Trekking)
14	Temisgam- Largyap- Pachnathang- Skuru (For Trekking)
15	Saspol- Saspochey- Rakurla- Skuru (For Trekking)

下記は解禁された外国人旅行の場所・コース(Panamik や Hunder 以遠も許可されることがある)

### Leh to Hanle Road Map

All distances in kilometers

